

巻頭インタビュー「自治の顔」

あわら市湯けむり創生塾

**特集** 坂井市の公共施設白書

**トピックス** コシヒカリ全国キャラバン  
白山小学校の廃校からほたるカフェ

職場探訪

「福井県里山里海湖研究所」

第35回全国自治研集会リポート

各自治体の注目施策 永平寺町・勝山市

子ども子育て支援新制度

自治研の窓

# 自治研

58 JICHIKEN  
FUKUI 2014

コシヒカリ全国キャラバン





## 水週間イベントで「利き水大会」 自治労県本部公営企業評議会



8月9日、福井市のショッピングセンター「エルパ」一階で、自治労水週間の取り組みとして、いろいろな水を飲み比べる「利き水大会」が開かれました。

飲み比べの水としては、水道水、ミネラルウォーター、福井市のおもてな水、など数種類が用意され、多くの親子連れなどが続々と訪れ、水の味を確かめながら飲み比べしていました。参加者には、「めぐるちゃんぷりクラ」など数種類の商品も提供されました。

このイベントは、自治労福井県本部公営企業評議会のメンバーが「水環境基本法」の制定により、8月1日が「水の日」と定められたことを記念しての企画でした。

contents	title	page
巻頭インタビュー	「自治の顔」第17回 「あわら市湯けむり創生塾」	2
特集	坂井市の公共施設白書	6
トピックス	コシヒカリ全国キャラバン 白山小学校の廃校からほたるカフェ	10
インタビュー	職場探訪 「福井県里山里海湖研究所」	12
	第35回全国自治研集会レポート	14
	各自治体の注目施策 永平寺町：一般公募によるまちづくり 勝山市：はたや記念館ゆめおーれ	18
報告	自治研の窓 各地からのミニレポート	22
巻末	大和田日記	24



# 「巻頭インタビュー」 「自治の顔」

## あわら湯けむり創生塾 「おじえる座あ」



### ゲスト

創生部会 部長

笠原 修之さん

「湯けむり創生塾はどうして設立されたのですか。」

菅原さん 平成16年の合併を機に地域を一つにするのに若者同士で交流を持って何かできないかと話し合い、十年後、二十年後を見据えて、旧金津、芦原の若者を集めようとなり、平成17年にRATYという勉強会を開き集まりました。その時に国土交通省のまちづくり補助金で最高3億円というものに申請してみないかという話ができました。その当時、近畿日本ツーリストから地域再生マネージャーの吉川さんという方が来ていて一緒に勉強会に入って貰いました。地域性を生かして嶺北で全ての水ようかんが食べられる水ようかんミュージアムを作るとか、滋賀県の黒壁スクエアなど全国のいろんな事例を聞きました。

新しいものを立ち上げると話題性はあるが続くかどうかは別物だということ、やっぱり地元にある本物を打ち出したほうが続くだろうとなり、あわら市には芦原温泉があつて食べ物という切り口も本物だということで食と温泉を筆頭に事業を考えました。しかし、強会の括りになりました。しかし、その時には国交省の補助金申請は

終わっていました。

でも、せっかく10名位の若者が集まって夢と未来を語ったのなら何かしないと勿体無いとなり、福井県の地域ブランド活動創造推進事業という助成金を活用することになりました。これは地域ブランドを磨き上げるもので、条件としてはビジネスプランで三年の助成期間が終わったあとに自立できるプランというものでした。

例えば、三国で湊座が空き店舗を使つたジェラート販売という事例があり、翌年に永平寺町の燈籠流しや敦賀のラーメンが手を上げていて、あわら市も採択されました。

「本気度試され、一人50万の借金？」

事業化するにあたりメンバーの本気度を試されました。その事業はビジネスモデルなので補助金と自己資金が必要でした。2,000万円の事業の二分の一の1,000万円までは県が補助し、残りの1,000万円の半分をあわら市が負担し、残る500万円をメンバーで負担しなさいということでした。その時に一人50万円を出すと覚悟した8人が創生塾の主力メンバーです。借金してでも50万を出してやる気がある決意がスタートでした。

温泉の活用については旅館組合と話しました。若者が本気でやろうとしてくれているのなら旅館組合が500万円を貸しますと言っていた結果的に個人の50万円は出さなくて済みました。年間2,000万円の予算で何

をするかと検討した際に「湯めぐり手形」という話が出ました。当時の芦原では日帰り入浴は二軒位しかやっていませんでした。タオル付きで800円とか1,000円で温泉好きな人からは何で地元の温泉にもっと入れなのかという声がありました。それで、黒川温泉の湯めぐり手形の事例を聞き芦原温泉で全て入れる形で平成18年8月1日にスタートしました。

### 「おしえる座」発足で事業本格化 湯けむり手形、大好評

それと同時に市営観光案内所を自分たちにやらせてほしいと言って情報発信と観光案内もする「おしえる座あ」を発足させました。当時の湯のまち駅には市営観光案内所と隣に情報発信スペースが並んでいましたが一つに統合し、おしえる座あ事業と湯めぐり手形事業が8月1日に同時スタートでした。

直ちに、市内や県内でPRをやったところ、月に1,000枚



位売れました。1枚1,500円の手形が1,000枚売れると月150万円になり年間12,000枚売れて単純計算で1,800万円位の売り上げになりました。地元のニーズに合い話題性もあって良い結果でしたが、実際は旅館に困った面がたくさんあると聞きました。一泊15,000円から20,000円の宿泊のお客様と500円相当のシールで入る入浴客を同じ扱いは出来ないと言われました。特に夏場に芝政や三国サンセットビーチの帰りに砂を落としてお風呂に入られるとトラブルになるとい苦情が結構ありました。

銭湯ではないという旅館の声で条件を少し厳しくしました。最初は14時から21時まで旅館組合の18軒全部で開けて下さいと言っていたのですが、老舗旅館は16時からしか接待さんが来ないとか下足番がないというシステムの違いがあって、旅館にあわせて湯めぐり手形の利用を年々変えていきました。今は年間3,000枚から4,000枚を目処に販売しています。

### 「屋台村」誕生、幾つもの 試練あり

「湯めぐり手形」の成功で旅館の誘客面でも良かったのですが、二つ目の問題は、手形で浴衣姿の人や一般客の人の回遊は増えたが行くところがない、昔ながらの活発な商店街もなく寂しくなりつつある温泉街で行き先も作らないといけない。もう一つのテーマの食文化をどうするのか、何がした



あわら温泉屋台村

いのかと話し合いました。そこで北海道の帯広で北の屋台村という所がすごく賑わっている観光客を集めているので視察に行きましょうとなり、創生塾のメンバーと当時の市長を含め関係者で行きました。

帯広駅前前で福井駅前より大きく、ビル街の空き地を活用した所で賑わっていました。これを田舎の温泉街の何もない所でやりたいと帯広の人に言ったら、ある程度の人口がないとお客さんが回らないので不可能だと言われました。

それでも芦原温泉は観光客が8万人くる街ですから何とかなるはずだとメンバーが全国の情報を集め、市長にもご理解いただき市所有の駅前の空き地を使う形で何とか進みました。当時、広場は砂利で公園がいいのか商業地がいいのか行政は悩んでいたのです。その場所に創生塾が屋台村として一面を貸してほしい、商業としてお客さんが集まる場所かどうかを試させてほしいとお願いしました。県補助金の条件がソフト事業で

した。帯広の屋台村はコンテナをお店の代わりにしていましたが物を買えばソフト事業ということでした。県も領収書が出れば物販扱いとなるので、それで良いと聞いたのですが、そこに水を引いて商売しようとする土木事務所の見解では基礎が必要との見解でした。コンテナだけなら買えるが基礎をもつ立派な建物までは建設できないと私たちは困りました。

それで補助金の最後の条文に知事が必要とみなすものとあったので、西川知事に直談判に行きました。視察先の状況やイメージも示して説明をしたら、知事はOKと即答され土木事務所の許可も出ました。

ところが計画を具体化したら今度は資金不足が明らかになりました。補助金も制限があり、湯めぐり手形も売れているとはいえ利益は薄く、借金で一千万円の借金をしました。建物があって逃げも隠れも出来ないということで創生塾の代表が保証人でした。幸いにその後5年位で返済しましたが当時は厳しかったです。

### 「食にこだわり、地元優先が成功

食も本物という切り口でしたので、屋台村の各店は必ず地元の物を使うこと、チェーン店は駄目、地元の人が地元の食材を使って観光客を持ってなすというコンセプトにしました。北部丘陵地の野菜や果物、三国の魚や地元の越のルビーのおでんなど、マスコミにも取り上げられて「るるるぶ」の福井県観光地口コミランキングで二年連続一位です。



屋台村を知らなかった宿泊客が旅館から勧められて来たら意外と美味しいものが沢山あり心地よく、七人位の狭いカウンターですが、店主との語らいで地元の話がいっぱい聞けてすごく良かったという評判でした。

コンパクトながら年間三万人が来ています。帯広視察では観光客目線にするなど言われました。旅行者は地元の人が行っている美味しいお店に行きたいと思うので、地元の人を掴まないと観光客が来ないという話でした、今は七割位が地元のお客さんで金曜、土曜日は待っていただくほど賑わっています。だから出店者も生計が立てられています。

食べ物も福井の食は本物だと人気があるのでハイレベルは求めませんが素人すぎると逆にお客様に迷惑が掛かるので試食会をして出店の審査をしています。

### ゆるキャラ「湯めぐり権三」や、新商品も開発しています

笹原さん 全国でゆるキョウブームなので、派手にやったら面白いと「湯めぐり権三」と五兄弟の頭に桶をかぶった芦原温泉キャラクターをデザインしてあるメンバーがつくりました。

「湯けむり権三」の着ぐるみは地元の子どもたちにも人気があり市のイベントへの参加や観光出向宣伝に県外でも活躍しています。最初はタオルや温泉グッズだけでしたが毎年文房具や新しい商品を出して今は二十種類くらいに幅が広がっています。

他にも当地の温泉水だけが詰め

込まれている源泉100パーセントの美肌水スプレーという創生塾が作った芦原のオリジナル商品があります。ムッシュプリンといって、地元の卵を使ったプリンもできました。羽田空港でしか売って



芦原温泉「芦湯」

いない天空プリンというのが流行っていて、その流行に乗った商品開発で一日数量限定で地元のお菓子屋さんが持ち回りでレシピを統一して作っています。今は、富津のさつまいもを混ぜたプリンをあわら市の方が作っています。

事業全体では若干の売り上げ利益も上がるのですが、それはメンバー全員が給料を貰っていないからです。まちおこしの一環なので薄利多売でやっています。

まちづくりは「若者、馬鹿者、よそ者」と言いますが、基本は若いメンバーです。仕事半分、まちづくり半分、馬鹿者もいれば、デザインをやっている人は秋田県出身

の婿入りで福井に来ました。ネーミングでは駄洒落的に福井弁を使っていこうと話してきました。

観光案内も当初は湯のまち駅だけだったので、3年ほど前からJR芦原駅の案内所の委託も受けて、市内二箇所の市営案内所として受けています。観光客の第一印象が案内所なので、そこが楽しそうに見えることまちが良さそうに見えるので入り口も開放的に改善しました。

### 失敗や楽しみはありますか

笹原さん 三年間の補助金の期間が終わって四年目に自立するにあたって、利幅を上げなければならぬと湯めぐり手形を1,800円に値上げしたら一気に売れなくなりました。地元の人の利用が多いのですが、市のセントピアあわらの入浴料が一人500円で、湯めぐり手形はシール三枚で1,500円だったのですが、1,800円にすると一枚600円に上がり売れなくなりました。それで一年間だけ頑張りましたが、あまりに落ち込みが激しく翌年1,500円に戻しました。失敗の一例です。

基本的には実感の湧く事業なので楽しいです。創生塾がやっているのはリアルなまちづくりです。今まで無かったものを地域に立ち上げて成功事例としていろんな人が取り上げてくれるという状況を目の当たりにするとすごくやりがいがあります。

### 「あわら湯かけまつり」と「ニコニコ動画」の「コラボ」

笹原さん 湯かけまつりも合併記念として起ち上げた夏まつりです。創生塾と商工会の若者たちが集まる中で合併を記念に金津祭りの山車や太鼓の雰囲気と温泉街とコラボした夏祭りができないかということでも話し合いました。

外国の収穫祭でトマトを投げ合い町中トマトで溢れる祭りにヒントを得て、芦原は温泉をばら撒いて町中をびしょびしょにしたら面白いというアイデアができました。さらにトラックの後ろに太鼓を載せて飾る金津の花車でまちを練り歩きながら、最後にお湯をかけまくろうと盛り上がり、地元のメンバーが立ち上げました。

今回が9回目だったので私が実行委員長を受けた一週間後にニコニコ動画というところから、あわら市在住のニコニコ動画の会員から出されていたうちのまちに



あわら湯かけまつり



(湯のまち駅前にあります)

来てほしいというオフアワーが当たりましたと「おしえる座あ」の観光案内所に電話が来ました。「湯かけまつり」とコラボしたいのですがという話でした。全国10箇所、夏まつりとコラボする企画の一つに選ばれたということでした。六本木でのPRプレス発表会では、私も湯けむり権三の被り物を着てPRしました。湯かけまつりは湯の花公園の広場で開き、市長もすぐに理解していただき予算も付きました。ニコニコ町会議は今年が四回目でしたが10か所全てで市長が出ていました。何十万人にアピールできるということを認識されていました。

駅前のロータリーに20トンのお湯を用意して大きいタライを並べて、お湯を溜めて桶で掛け合うのです。基本は神輿にお湯を掛けるのですが、最後には神輿も人も関係なくビッシヨ濡れになるまでお湯を掛け合いました。

その後、駅の上から櫓を組んでまんじゅうや菓子等を5,000個位撒きました。それもニコニコ動画の映像に流れて21万5千件くらい見えています。アピール効果が大きくてコラボしたかがあります。

来年は芦原温泉開湯130周年記念事業が行われます。ニコニコ動画を見た全国の人に、来年は130周年祭がありますと声をかけて湯かけまつりを核とした祭りをするように進めています。

たぶん130周年祭は、ロングランで夏から秋、冬まで連続してやる予定です。全国のJRが北陸に送客しましょうという北陸DCキャンペーン中で来年の十一月と十二月が福井県の月です。特に十一月からカニが始まって旅館のお客さんが増えるので、その時にも130周年記念として、あれもこれも引き入れてやろうと考えています。

### —漫画「ちはやぶるウィーク」も人気です。

菅原さん ちはやぶるウィークは、2009年に漫画大賞をとって、2010年に話が入って来ました。「ちはやぶる」の漫画の一コマがJR駅前の商店街で、たまたまその建物に商工会が情報発信スペースとして入っていました。商工会

でやっている「あわらんでな」というアンテナショップですが、借りている建物が漫画でピックアップされている、いわゆる聖地です。漫画好きな人は聖地参りといって漫画に出た場所に行きたいのです。なのに「ちはやぶる」とか一言も触れていないのもったいない。もう何人か聖地参りに来ていますという話でした。

2010年にそんな話をしていたのですが、2012年に予算要求の動きが出て、13年に市が大々的に「ちはやぶる」を取り上げイベントを起こしました。二年間眠っていました。

### —行政の素早い対応がほしいです

もつと流動的な予算の持ち方ができないのかとよく市に言いますが、流行に乗らないといけない時に議会の補正予算を待たないとか待っている間にブームが終わります。リアルタイムで2,30万円でも直ぐに付けられる部長や課長権限の予算があればと思います。ちよつとしたことでチャンスがあるのに動きが遅れてしまう。遅れると市民は熱が覚めてしまい、来年やるならもういいですとなりません。

やりたい活動が早く出来るスピーディな対応が必要です。全国的にも有名な市長は対応が早く、やることも派手です。あれを地方でも出来ないかと消滅自治体の一つになつてしまふのではないかと思います。

ニコニコ動画の時、市長の動きが早かったのは、四月に話をして五月の頭には六月の補正予算を通

すからということでも50万円だけ付けると言って貰いました。長いこと机の上で考えて事務をするだけではなく素早く判断してくれると若手の育成に繋がると思っています。創生塾の活動も10年近くが経ちました。湯めぐり手形も屋台村もあわら市の武器になりました。北陸新幹線がJR芦原温泉駅に来る中で私もプロジェクトで話をさせて貰っていますが、次は金津の駅前に力を入れないといけないと思っと思っています。

### —10年後には「竹田川」を生かしたい

菅原さん 創生塾が活動しているエリアは、金津から芦原温泉、東尋坊、三国までの流れの中で、共通するものは竹田川です。もともとこの地域が発展したのはこの川があつて、北前船があつて、川を遡上して芦原、金津へという歴史的背景があるので、将来には川をいかすと面白いというのが頭の中にあります。

これから先の高齢化社会で観光客の年齢層が高くて時間やお金に余裕のある人があわら市に来た時に、竹田川をゆつたり舟下りして温泉に行くような江戸時代みたいな感覚を旅の中で取り入れて貰えたら面白いと考えています。

### —お忙しい中、ありがとうございます。

(編集部 前川 中村 西正 伊藤)

# 特集

# 坂井市の公共施設白書



総務部行政経営課

長谷川 正 広  
小林 壮太郎



—どうして「公共施設白書」策定に取り組まれたのですか。目標はどのように考えたのですか。

坂井市は平成18年3月20日に、4町が合併して誕生し、全ての公共施設はそのまま市に引き継がれました。

今後を考えると、人口減少と少子高齢化、普通交付税の合併算定替えの終了、施設老朽化の進行、多くの類似施設、市民ニーズの多様化など多くの課題があります。その中で、まずは公共施設が置かれている状況を明らかにして、市民や議会と共有していく必要があると考え、

白書策定に向けた取り組みを始めました。

また、実効性を持たせるため、施設情報の分析評価だけでなく、施設の有効活用に向けた視点と方針の設定、施設ごとの今後のあり方・改善の方向性までを含んだ内容とすることとしました。



—どのような作業から始めたのですか。また、庁内体制はどのように構成したのですか。

まずは、各施設データの収集から始めました。同じ考え方で収集するための職員説明会を実施し、統一した様式により施設の実態把握を行いました。

庁内体制としては、行政経営課が主体となり、各施設所管課と連携して調査分析を実施しました。また、副市長、教育長、各部長級職員で構成される行政改革推進本部において、方針や施設の方向性の検討を行いました。

### —職員間の現状の認識や情報共有はスムーズに進みましたか。

職員の情報共有のために、分析した施設データや市民アンケートの結果を基に、職員の勉強会を実施しました。施設の運営には思った以上にコストがかかっていること、利用状況についても部屋ごとの稼働率という考え方では非常に低い状況にあるなど、結果に対し

ての驚きが大きかったようです。

### —具体的に検証する視点は、どのような視点で行ったのですか。

検証にあたっては、4つの視点で行っています。

1つ目が、更新費用の観点から施設の保有総量を検証しています。

昭和50年前後に建てられた多くの施設は30年以上が経過し、本格的な更新時期を迎えています。仮に一定の条件下で全て建替え維持した場合、今後40年間で569億円が不足する試算となり、全ての施設を維持していくことは極めて困難な状況にあることが分かります。

2つ目として、数値データを基にした費用対効果

用途が異なる施設間でも運用面を工夫し、施設の多機能化・複合化を検討しています。

4つ目として、事業の優先順位を総合的に検討した上で、政策的な観点から検証しています。例えば、災害時に拠点となる小中学校や体育館等の避難所施設、地域資源を活かしたまちづくりを進める中で拠点となる公民館などについては、たとえ数値データによる評価が非効率であっても、維持更新を検討していく必要があります。

### —数値としての検証と住民の生活利便性の整合性はどのように検討されましたか。

付けています。

3つ目として、

施設機能の観点から検証しています。

施設の用途が違ってても会議室やホールなど、同様の「機能」を持った施設が比較的近いエリアに重複して存在しています。

確かに市民の利便性の確保も重要です。しかし、白書策定のきっかけとなった課題を解決していくためには、何らかの手を打たなければなりません。そのため、客観的な視点で分析した施設情報や財政状況の資料を基に、市民や議会、各団体との意見交換会を通して検討を重ねました。



―各施設の現状把握の中で、最初の認識と変った実態はありましたか。

職員勉強会でも出た意見ですが、これまで利用状況については利用件数と利用人数で把握していました。しかし、各部屋の稼働率で算出したところ、極めて低い状況にあることが分かりました。そのため、同様の機能を持った施設については、一定のエリア内で複合化を図ることで、保有総量を圧縮できると考えました。

―住民の皆さんや議会との対話、情報共有についての取り組みはどのようなことを行っていましたか。

白書を策定する過程で、市民アンケートや市民、議会を対象とした意見交換会を開催しています。また、策定期間中には市の広報に特集記事を随時掲載しながら進めてきました。

アンケートは意見の違いを把握するため、無作為に抽出した一般

市民と施設利用者を対象として実施しました。しかし、実際には結果に大きな差はなく、見直しの必要性ではほとんどの人が「必要」としており、施設維持方針では、施設の統廃合により対応するという意思確認ができました。

また、意見交換会では、市の現状、アンケートや施設分析の結果を基に開催しています。各施設の稼働率の低さや耐震性に課題のあらうながらも、「施設サービスの受益と負担を考える機会となった」「市全体で施設のあり方について考えていくべき」といった意見をいただきました。特に、まちづくりの拠点となる公民館については多くの意見が出され、まずはまちづくり協議会の組織強化に取り組みとともに、ソフト面の充実を図りながら活用手法を検討していくこととなりました。

―「公共施設白書」策定後の皆さんの受け止め方はいかがですか。反対や賛成、要望など出てきませんか。

白書策定後にシンポジウムを開催し、基調講演やパネルディスカッションを行っています。参加された市民の方から、「公共施設の現状を認識するいい機会となった」「現状について市民に伝える



とともに積極的に実施してほしい」といった意見をいただきました。当日のアンケート結果でも、「公共施設のあり方について関心が高まった」「資料で示した方向性について賛成」と回答した人が80%を超える結果となりました。

確かに、白書において示した方向性については、これまでの申し合わせ事項や条件等を考慮せず客観的な視点で検討を進めてきたものであるため、地元の方との協議の中では、反対、賛成いろいろ意見をいただきます。ただ、一部の受益者である市民のためだけでなく、その他の負担者である市民の意見も大切にしていきたいと考えています。

―これからの具体的な計画と進め方を教えてください。

まずは、全庁的な観点から整合性を図り、着実に進めていくことだと考えています。白書策定時には一時的に各所管課にある施設データを収集しましたが、今後は一元的な施設情報の収集管理、分

析を行っていく予定です。

また、市民、議会、行政が問題意識を共有化しながら乗り越えて行く必要があるため、共通理解を図り、同じ認識の下で進められるよう情報公開を行っていきます。

現在、白書に示された方向性に基づいた取り組みは、平成24年から28年までの5年間で期間とする坂井市第2次行政改革大綱の実施計画に取り込み、年2回のヒアリングを通して進捗管理を行っています。

特に、幼稚園と保育園については、平成24年度に教育委員会と子育て支援課において策定した幼保一元化年次計画に基づいて、保護者や地元住民への説明会を行

いながら、民営化も含めて順次進めています。平成23年度時点で公立35園、私立12園であったものが計画終了後には公立17園、私立18園となる予定です。また、まちづくりの拠点となる公民館のコミュニティセンター化については、白書策定時の意見交換会でも多くの意見が出されましたが、平成25、26年にコミュニティセンター化検討委員会において検討を重ねた結

果、平成27年度から移行することとなりました。

―県内でも今後は同じような取り組みを計画される自治体があると思いますが、実際に進めてきた先進自治体として、アドバイスなどはありますか。

今年度、国からも「公共施設等総合管理計画」の策定を求められ



ているように、インフラも含め公共施設のあり方を考えていくことは、自治体の責務となっています。今後、人口は減少し、財政状況も厳しくなっていくことが予想され、これまで建設された全ての施設を維持更新することは極めて困難になります。仮に維持していくことになれば、予算の多くを配分することになり、そのツケは将来の子ども達に残すことになります。

いのかを考えてみるのだと思います。そうすれば、民間に利用してもらうことで有効活用できる施設は民間へ、特定の地域や団体で使っている施設は地域や団体へ、十分に利用されているとは言えない施設や耐震性のない施設は機能を他へ移し、機能集約を図ることで統廃合を進めるといった考え方が出てくると思います。

次に市民と議会との意思の共有化です。「総論賛成・各論反対」となりがちな議論を乗り越えるためには、フラットな形での施設評価と、客観的な数値を分かりやすくまとめた資料を基に、説明会を積み重ねていくことだと思います。

アドバイスはということですが、坂井市においても、試行錯誤しながら進めているところです。県内市町の皆さんとも協力して進めていければと思います。

―お忙しい中、ありがとうございました。

シンポジウムで講演していただいた先生は、「今は上り坂ではなく、下り坂、縮小の時代。厳しい財政状況を誰かが訴えて、市民・議会・行政、まち全体で情報と意思の共有を図る必要がある。施設の有効活用と市民参画がこれからの地域経営のキーワード」とおっしゃっていました。まずは、施設データを分析し、その施設サービスは必要なのか、その施設でしかできな

## コシヒカリ全国キャラバン

## 47都道府県を走り続ける

「コシヒカリ」は福井県農業試験場で58年前に誕生し「越の国に光り輝く米」の願いを込めて「コシヒカリ」と名付けられました。しかし、その誕生が福井県であったことは県内では知られていても、全国的な認知度は低い現状です。

そこで「福井で誕生したコシヒカリ」「福井県産のコシヒカリ」をどのように全国的にアピール、販売するか、福井県農林水産部生産振興課「福井米振興グループ」が注目のPR活動を始めました。その内容は、全国四十七都道府県を巡回する「福井発コシヒカリ全国キャラバン」「和食47全国キャラバン」です。

出発式は九月八日、県庁前で盛大に開かれ、全国への旅が始まりました。滋賀県草津市をスタートしたキャラバン隊は、兵庫、広島、島根から、九州鹿児島に渡り、大阪に戻った後は北陸路を北上し、東北青森へと走り続けました。

キャラバン隊の構成は、県職員二名・JA職員一名・企画会社一名（運転手）でメンバーは交代しながら走っています。各県での活躍はフェイスブックで毎日のように更新され、各地での歓迎ぶりを伝えています。

「自治研ふくい」編集部は、その全国キャラバン隊を十月二日に石川県小松市で密着取材し、福井米振興グループ主任の「徳堂裕康」さんにお話を伺いました。

●全国を回るアイデアはどのように生まれたのですか。



コシヒカリ誕生58年を迎え、福井県産・福井県産生であることを改めて全国にアピール・販売しようとグループ内で検討し斬新な企画で全国を回ろうとなりました。

●各会場では必ずごはんと味噌汁のセットでPRされていますがどうしてですか。

キャラバンで全国を回るにあたり、タイミングよく和食が文化遺産に登録されました。そこで和食の基本である、ごはん味噌汁のコラボによって「米」をPRし、福井県産だけでなく、全国の米消費を



増やしたいとの思いを込めました。味噌汁の味にも思い入れがあり天谷調理師専門学校との協力を得て、昆布だし・鰹だしにこだわった調理を指導いただいで提供しています。

●「コシヒカリのふるさと福井県」としてのこだわりはありますか。

県として県内のJAや生産者の皆さんと一緒に多様な栽培方法で品質を高める努力をしています。他県に負けない土づくりを進め、さらに美味しいコシヒカリ作りにこだわっています。「コシヒカリの福井県」の誇りを持っています。キャラバンでのご飯も基本的に福井産米を提供しています。

●全国では水が違うと思いますが、キャラバンでは、ご飯の炊き方を変えているのですか。

水は同品質のミネラルウォーターを使用しています。予算等の関係で、協賛企業を募りました。ちなみに、炊飯器は象印の極み羽釜を使用しています。

●各地での反応はいかがですか。

屋外でのイベントなので天候に左右されることが多く、集客にも大きく関係します。毎日、天気予報が気になります。

イベント会場の多くは地域のショッピングセンターなどですが、キャラバン隊の周りにはたくさんの方が訪れ大人気です。ご飯については各県それぞれのこだわりがあり関心が高いですね。味噌汁に加える郷土料理もご飯にぴったりです。

コシヒカリが福井で誕生した米という認識が全国で着実に広まっていく実感は嬉しく、大変ですが楽しいです。

(編集部 中村慎悟)





# 小学校の廃校活用「ほたるカフェ」に

## 越前市白山小学校安養寺分校

越前市白山地区で廃校になった小学校を活用したユニークな取り組みが行われている。その名は「ほたるカフェ」。地元の「安養寺町」と「白山地区自治振興会」の協力のもとで故郷の貴重な財産を地域住民みんなで楽しみながら次代に引き継ぐ活動である。

平成16年3月、越前市白山小学校安養寺分校が廃校となった。分校の地域に住む児童減少と本校である白山小学校の全面改築がその背景にあった。

地元民にとっては、世代を超えて思い出の詰まった校舎とグラウンド、分校を中心として続いてきた住民の交流と連携、それらは故郷の風景でもあった。

その校舎が廃校となる寂しさの中で、地元では何とか有効に使い続けられないか、との声が地域や集落のあちこちであがった。そうした声の中で、当面は校舎が立地する「安養寺町」

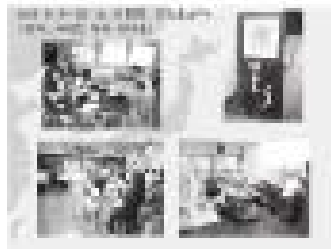


と市教育委員会が一年毎との無償使用契約を結ぶ形で活用の道が残った。さらに使用は安養寺町以外の人々の使用についても安養寺町の了解を得た場合は使用可能とされた。

地元主体で活用への道が開かれたことにより、色んな企画が可能となった。はじめは安養寺町の町内夏祭りや秋祭りが校舎とグラウンドで開かれた。続いて白山地区の別の場所で開催されていた2月の「冬物語」が2012年に開かれた。

続いては「シスターズ・ブラザーズ」という男女のグループが給食室を使って料理をつくり住民の触れ合いの場所を作ろうという話が盛り上がった。昼食を食べあいながら故郷の味や交流が続けられたらとの期待が込められた。

その場は「ほたるカフェ」と名づけられた。蛍が鑑賞できる6月の土日限定のオープンでメニューには、カレーライス、卵焼き、スムージ、サラダ、米粉で作ったシ



フォンケーキ、コーヒーなどが並んだ。一日50食限定だった。2013年夏に初めて開かれたがマスコミでも紹介され、地域住民はもとより県内各地からもお客さんが訪れた。

自然あふれる田園風景と懐かしい木造の小学校校舎、教室には当時使われていた教科書や文具も飾られ、音楽室では残されたオルガンによるコンサートも企画された。食べ物の味に加え、郷愁と安らぎ、癒しの雰囲気に参加者の胸にしみたという。2014年の「ほたるカフェ」も好評で参加者からは、継続しての開催と六月以外にも開いてほしいとの希望が寄せられている。

さらに活用は広がっている。今年の六月には、地元出身の女性が懐かしい校舎で結婚式をしたと希望し、約80名が参加する結婚式が講堂を利用して執り行われた。街中の結婚式場では味わえない和やかで素敵な結婚式は地域全体から祝福されマスコミでも紹介された。

他にも、地域づくり大会、女性会研修、全国めだか連絡会とザリガニつり大会などでも



他にも、地域づくり大会、女性会研修、全国めだか連絡会とザリガニつり大会などでも

利用されている。「廃校」と聞けば、うら寂しい風景を想像しがちだが、「越前市白山小学校安養寺分校」は、今も地域に馴染み多様な利用で貴重な地域財産として活用され生き続けている。

そこには、故郷の歴史と人々の暮らしを守り続けたいと頑張る元気な人たちが多くいる。「白山地区自治振興会」「安養寺町」「シスターズ・ブラザーズ」、そして多くの地域住民の皆さん、これからも益々のご活躍をお祈りしています。

(取材ご協力いただいた越前市白山地区自治振興会の増田久恵事務局長さん、ありがとうございます。白山地区は「コウノトリ」の住む地域としても注目されています。)

(編集部 伊藤藤夫)



# 職場探訪

福井県里山里海湖研究所

## 平成25年、県内全域の自然環境保全と再生を目的にオープン

研修事務リーダー  
細井秀之さんにお聞きしました。

「この里山里海湖研究所が設置された目的はなんですか。」

細井さん 平成25年10月30日にオープンしました。福井県全域の里山里海湖の保全再生をしようというのが目的です。



県内には三方五湖や中池見湿地などの豊かな自然がありますし、越前市白山地区のコウノトリを絡めて自然を守っています。三方五湖の周辺では自然再生推進法に基づいた三方五湖自然再生協議会が立ち上がっています。

このように、こうした動きをどんどん加速させていこうという事もありましたので、こうした動きをどんどん加速させていこうという事になりました。

契機になったのが平成25年のSATOYAMA国際会議です。

「研究スタッフや研究内容を教えてください。」

細井さん 研究員4名、相談員4名、事務職4名と常勤の管理職が1名で、常勤は13名です。

北川研究員は、年稿に含まれる花粉から縄文や弥生という太古の時代の植物の特性を精緻化している。我々の教育や縄文博物館の資料の精緻化をしていく研究です。石井研究員は、保全生態で福井県の植生の保全を研究しています。中村研究員は、民俗学で次世代に受け継げるような資料の掘り出しを研究しています。

福島研究員は、森里海湖の連続という事で森から湖の繋がりと幼児教育が得意ですので、学びの森という活動など体験活動で人材育成や子どもたちの教育を進めていくことをしています。

全国でも初めての研究施設です。地域の皆さんに参加していただく活動も多いです。

細井さん こうした多様で広範囲な研究を行う研究所は都道府県で初めてと言われています。私は事務部門担当なので写真コ



ンテストやリーダーズカレッジという県民に対しての講座などの企画や、ドイツの方が来られての研究のお手伝いなどをしていきます。

この研究所は、福井県の自然環境課の一つの組織です。以前は環境政策課で国際会議を担当して、そのまま研究所に赴任となりました。

細井さん 出前講座で研究員が元の小学校や公民館、農業団体、スパイスイェンスハイスクールなど県内一円へ出掛けて講座をしています。これまでに千名を超える人が受講しています。リクエストが多くて研究という本業がおろそかになりはしないかと嬉しい悲鳴です。研究員はまじめな方ばかりなので、頼まれると一生懸命に分かりやすい資料を作っています。写真コンテンツもありますし、カレッジは15回講座で福井市のアオッサで行っています。先日、ドイツの方に来ていただいて三方青年の家で講演会と里山里海湖の研究発表もしました。県内の若者が里山文化に触れることが少ないので、気軽に参加してもらいたいリーダーを育成するSATOYAMA・SATOYAMAという体験型の企画も好評です。

森の中で過ごす「学びの森」は人気です。

今年「学びの森」を設けました。三方五湖の上の若狭町気山、美浜町との界ですが区から森を借り受けて、子どもたちが体験できる広場です。荒れる森に人が入ることで森がどう変わっていくのかという研究です。十月にも企画があり加者には好評で森に入ったことのない子どももいました。





杉の木を間伐して子どもたちと一緒に作業をし、森の中でご飯も炊いて食べます。あまり参加者が多くなると危険もあり大変ですので、大体20人弱を目指しています。

県内のいろいろな方とのネットワークについても充実したいですね。昨年までは里山里海湖を含めて県庁の方で会議をしてみました。が今後はさらに自然団体とのつながりを強めて行きたいです。

—学校との連携はいかがですか。—

細井さん 元教師の方も研究所の中にいまして道徳の時間で環境の分野からも入っていくと先生方も入りやすいということで教材を作りました。ホームページからもダウンロードできるし、学校にも配布しました。例えば年編採掘の写真が入っているという補助資料もダウンロードできるようにしています。

—職員としての楽しみやご苦労はいかがですか—

細井さん 子ども達の笑顔を見るのが嬉しいです。若狭町自体が自然豊かな所ですので守っていきたいですね。今は獣害やゴミなどで荒れていて残念なことがたくさんありますので、活動を通して少しでも改善していければと思います。自然生態や環境保全は人間が手をつけないければ守れないこともあります。昨年のSATOYAMAイニシアティブという会議において、人の手が入ることで保たれる自然があり、山に入って枝打ちをすることで下に草が生え保水力が高まって豊かになると言われました。山に入らなかつたことで獣害が増えていきます。嶺南は鹿が多く出ます。

苦労ではないですが、この研究所自体が 立ち上げの時期なので名前と顔売ってアピールしないといけないと考えています。

13人のマンパワーは限られていて大変ですが、元教師や県で林業に関わっていた非常勤嘱託の相談員の四名がおられるので色々な活動が出来ます。森林組合もお手伝い下さり助かっています。

水月湖の「年編」が世界標準となりました。4つの奇跡のおかげです。

細井さん 年編の研究は20年前前に東北大学の安田先生が研究していました。環境光科学で著名な方です。研究所のアドバイザーにもお願いしています。

年編が県民の皆さんに有名になったのは数年前ですが具体的には中川毅研究員さんが精緻に調べたからです。年編に含まれる一つの層の炭素14Cというものを調べたということ。炭素14Cはあらゆるものに含まれていて半減期といって一定の期間が経つと減っていくのだそうです。

その減っていく年数を数え、一つ一つの層の炭素14Cを調べていくと実際の値が分かります。年編は一年一枚なので、年編の枚数を数えるときつちりと出てきます。数年単位でしかズレないです。

何年前にある炭素14Cの数は幾つだと調べ他の化石と比較すれば何年前とピタリと判明するのが年編のすばらしい点です。また、年編に含まれている花粉などを探すと、その時の植性や火山の噴火、地震発生などが分かります。年編を世界標準と決めたのは専門の国際的な学会です。炭素14Cの単元は世界共通です。

世界標準となった背景として、水月湖には四つの奇跡が重なったと言われています。川の濁流は三方湖が受けて水月湖には入ってきません。波が立たず、地盤が沈降して、生物がいない湖底、の四つです。本当に奇跡としか表現できない内容だそうです。

皆さん、ホームページを見て、実際に見学したり、イベントにも参加してください。お待ちしております。





## 佐賀市での全国自治研集会に

### 福井から二十五名が参加

#### 福井県勢、活動内容や発言など、存在感たかめる

10月16日から18日、佐賀市で全国から約2000名が参加して開かれた全国地方自治研究集会に福井からは自治労福井県本部や自治研センターから25名が参加し、各分野で学び、県内の取り組みなどを積極的に発言しました。

一日目夜のパブリックセッションでは、越前市のNPO法人丹南市民自治研究センターが運営全般を仕切り、これまでの全国集会で最優秀賞に輝いた取り組みのその後というテーマで全国の活動が紹介され、県内からは越前市の公共サービスユニオンが児童養護施設の設立から今日までの市民と行政などとの連携協働の取り組みを報告し、高い評価を受けました。

また、35歳以下の若い活動家によるネットワークをつくるU35の会合では鯖江市職の横井さんが運営の中心メンバーとして活躍しました。

この研究集会に対し、自治労福井県本部からは次のレポートが報告され、福井市職労の生活困窮者支援のレポートは分科会でも発表されました。

#### 【福井市職労】

生活困窮者自立支援法の実効性をどのように確保すべきかを

#### 【福井市職労】

発信しよう！地域の農林水産業つなごろう！生産者（地）と消費者（地）

#### 【越前市職】

越前建設ナノブロック課

#### 【越前市職】

自治研推進委員会と市民活動団体との連携した取り組み

#### 【大野市職労】

ソウルフードとんちゃんぐでまちづくり

#### 【坂井市職】

地域に求められる社会教育施設とは？（みくに龍翔館）

#### 【福井県本部】

知ってください！公共サービスの現場を（学校給食調理）

#### 【福井県本部】

日本一の社会福祉評議会をめざして（福祉自治研集会）

現場をみつめ、未来をよくする視点を学ぶ

自治労福井県本部

中村 圭介

16日のパブリックセッションから始まり、17日の全体集会、18日の各分科会という日程をフルに満喫できました。

パブリックセッションでは、活動的な各自治研センターの取り組みを各ブースにて詳しく聞き、活発な意見交換が行われ、私はこの場で大牟田市職労の「託老所設置と市街地での福祉サービスの展開」の活動に関心をもち、質問や意見交換を通じて大牟田市職労の方と親しくなることができました。

17日の全体集会では、嶋田九州大学準教授の記念講演や、パネルディスカッションが行われ、大変内容の濃い提起があったと感じています。また、今回のパネルディスカッションはツイッターと連携し、パネラーと参加者の双方でのやりとりがなされ、臨場感あふれる全体集会でした。

18日の各分科会では「地方税財

政と公共サービス」の分科会に参加しました。この分科会では、上記のテーマに関連した全国の各自治体職場の仲間からの報告が行われ、先駆的な取り組みの報告を聞き、大変良い刺激になりました。

自治研集會に参加して感じたことは、まず参加者の情熱です。その情熱は「現在」を見つめ、そして「未来」をよりよくしていくべきかという思いに由来するものであると感じました。

二つ目のキーワードとしては、「現場」です。どの発表・レポートも現場を大切にしていると思えました。現場の視点なき活動は、自治研においてはありえないといっても過言ではないように感じました。なぜなら、現場があるがゆえに時に当事者は悩み、またある時には意見や思いをな

かまとともに分かち合いながら前に進んでいくものであると感じたからです。そのような熱い思いや、多様な自治研の現場からの視点を共有できたこの集會は非常に意義深いものでした。

## 「昼休み散歩」は是非か？ 鯖江の実例が全体集會で議論

鯖江市職員労働組合

内田 久仁

17日に鯖江を出発すると開會時間間に合わない・・・ということ

「蛇口（中央）から水（補助金など）を勢いよく流しても、傾いたお盆には水はたまらないし循環しない。蛇口を2本に増やしても、水の量を増やしても同じことだ。大事なのはお盆の傾きを水平に戻すこと。地域間格差をなくす事こそ重要である」

佐賀の天気は2日間とも絶好の行楽日和でした。フィールドワークという名の観光に後ろ髪を引かれつつも全国各地から集まった公

鳴田准教授の記念講演は、事なかれ主義、思考停止から脱却し、市民にとって役に立つ職員を目指すことの大切さを拝聴しました。これからの公務員の求められる働き方は総合性、中立性、専門性の3つの特性が必要とのこと。その中で、最近耳にすることが多い「顧客志向」についても話され、相手に不都合・不利益なことがあっても正義があれば正面から口

一日目の午前中はあいさつを受けた後、九州大学大学院の嶋田准教授からの記念講演、午後はパネルディスカッション。2日目はそれぞれ

パネルディスカッションでは、ツイッターを使い会場からの意見感想をスクリーン表示し、双方方向型の討論となりました。討論のテーマにも挙げられた「昼休みの散歩の是非」は、鯖江で起きた実

あいさつの中では古川佐賀県知事が特に印象に残りました。地方の地域間格差をお盆の傾きに例え、

「過剰反応では」など反



応がダイレクトにあり、これもツイッターならではの。「公務員バッシングに過剰反応すると文句を言われないことが仕事にすり替わってしまう。公務員の仕事は市民を幸せにすること。市民の要望である理想と行政の現実の隙間を埋めていく仕事が必要」との意見が印象に残りました。

自分がどう業務に取り組み、住民（自分も含め）がいかに幸せになるか、住みよいまちづくりができるかを集中して考えた2日間でした。

## 「やわらかい行政」が キーワード

大野市職員組合

金森 崇晃

今回初めて自治研全国集會に参加しました。芸人はなわ氏の唯一のヒット曲「SAGA佐賀」で幕開けし、荒金自治研推進委員長は八代亜紀のムーディな曲で入場するという、ゆるっとした良い感じのスタートにまず楽しませてもらいました。

その後、基調提起から雰囲気は一変し、記念講演、パネルディスカッションを通じて「自治研って何?」「地方公務員としての働く姿勢とは?」を十分に意識付けしてもらおうことができました。

特に、市民同士が話し合う本当の「協働」が大切だけど、それが一番難しいことを再認識しました。今回初めての試みのツイッターの「ジャイアンや出木杉君タイプの市民の意見ばかりを自治体は採用している。のび太君からも意見をもらうべきだがそれが難しい。」

というつぶやきに納得するとともに、本当の協働を作り上げるためには、キーワードとして提言されていた「やわらかい行政」を職員一同で作り上げていくことが重要だと感じました。

翌日の分科会は、人気殺到の第三分科会「人口減少にともなう自治体・地域の在り方」に参加しました。今年五月に発表された地方創生会議の報告で、地方消滅について強い危機感を感じていました。山下祐介氏（首都大学東京・准教授）の基調提起と先進地の事例発表を通じて、問題を整理することができました。人口減少の不安の悪循環に陥らされることなく、地域に適した手法で、統制・支配から自治の再生・協働への転換が求められているとのことでした。

## 「図書館の可能性」再発見

自治労福井市職員労働組合

釣部 紗代

今回大会に参加して、自治体職員のあるかた、まちづくり、さらには観光を考えるうえで大変有意義なものとなった。

記念講演では自治体職員の働き方として、レンガを積んでいるレンガ職人の例のように、どんなに些細な作業でも自分の業務をただの単純作業ととらえるのではなく、よりよいまちをつくるための一つの大事な工程という考えを持って、日々の業務に取り組んでいきたいと感じた。

逆に考えると、よりよいまちをつくること、ないし住民の幸福度を向上させることにどう考えてもつながらないことについては、その作業を削減していく必要もあるということに気づくことができた。分科会では、さまざまな形で図書館を生かせるということを認識





することができた。今なにかと話題の武雄市に実際に訪れてみると、T S U T A Y A が指定管理者となつて運営しているというところで、販売用の図書と貸し出し用の図書が同じ建物内にある不思議な空間だった。図書館スペースにも飲み物を片手に本を探したり勉強したりする人が見られ、想像する「市立図書館」というイメージを何倍も上回る開放感にあふれた洗練された場所だった。飲食による図書の汚れや、図書館独特の静かさを欠くことなど、問題点はあるものの、交通の便もいいとは言えない人口5万人の市のこの図書館にあらだけの人が集まっているのを目の当たりにして、ぱっと目を引く話題性は少なからず必要だと実感した。

また、意としてか意とせずなのか、図書館というだけでなく観光地としての役割も果たしていることも興味深いと感じた。

一方で、直営をしている分科会の発表に触れ、図書館本来の役割の重要性も理解でき、図書館の可能性を再発見できた。

また、懇親会では、福井県内の

市町村の方々と話す機会があり、さまざまな画期的な取り組みを聞き、よい刺激をたくさん受けることができてとてもよかつた。

### 前夜祭「パブリックセッション」 丹南自治研センターが運営

全国自治研集会の前夜祭と位置付けられた『自治研パブリックセッションコース ① 歴代自治研受賞活動・政策起業のその後』は、越前市の丹南市民自治研究センターが運営主管団体として、その企画・構想から運営・進行までを一手に担いました。全体進行は、丹南市民自治研センターの笹田和子研究員が担当。全国津々浦々から40名の参加者を得て開催されました。

第一部は、川崎規生研究員をコーディネーターに、パネルディスカッションを開催。

パネラーとして登壇したのは、大牟田市職労働組合、越前市公共サービスユニオン、松江市職員ユニオンの各単組代表の方々。今現在も、各地で取り組んでいる在宅所や児童養護施設など、「職場自

治研活動」を契機として政策起業した事業の運営実践について、丁寧な報告を受けました。

その後、第二部として、ポスターセッション&交流会を開催。集会参加者たちは、活動の様子を展示したポスターパネルの前で、パネラーたちと自由闊達に意見交換を行いました。

### 「自治研チャレンジサポート」 投票で「越前市公共サービス ユニオン」に決定

また翌日のメイン集会初日には、『自治研チャレンジサポート』の投票が行われました。

これは、自治研の芽となりうる企画を募集し、採用された企画に対して自治労本部から助成金を交付するという新たな自治研活動活性化イベントです。採用方法は、集会参加者の投票により上位2つが当選となるというシステムでした。

全国から公募した5チームの意欲的な取り組みが審査対象となり、投票の結果、越前市公共サービスユニオン提出の「自立支援・地域福祉研究」（アウトリーチ型子育て支援センター、ケアラズカフェ、地域連携による知の拠点化づくりに関する実践研究）が、見事2位に当選し、今後2年間の具体的な活動が次回全国大会で報告されることになりました。



#### 「永平寺町未来会議」を設立

永平寺町では、県内でもあまり例のない一般公募によるまちづくり団体を設立しました。3月より就任した河合町長の目玉政策の一つとして注目を集めていますので、その概要を永平寺町総務課の朝日駿介さんにお伺いしました。

【この会が設立された背景や、目的はなんですか？】

永平寺町では、「町民がまちづくりの主役となる仕組みづくり」が重



要と考えています。自分たちの周りのどのような課題があるか町民の方の目線で検討し、町民と行政が一体となって、課題解決に向けて取り組むため、誰でもまちづくりに参加できる環境づくりとして、七月より「町民まちづくり会（仮称）」を設立いたしました。

この会では、町民の方からより魅力あふれる永平寺町をつくるための意見や考え、民間で活躍されている皆様の豊富な知識と経験などを聞いて、町政の参考にすることを目的としています。また、会員の希望に沿った運営方針としており、会員から会の名称を募集し、多数決により「永平寺町未来会議」という名称に決定しました。

#### 【会員の要件はあるのですか？】

「永平寺町内に在住及び在学している方」を対象としています。ただし、地区要望や宗教活動など趣旨に照らして適当でないと思われる場合は、対象外となります。任期は、平成28年3月31日までとし、入会及び退会は自由です。

11月10日現在で、会員数は35名、大学生や商工会青年部など若くて勢いのある20代や30代の方も多く入会しています。

#### 【どのように会議を行っていますか？】

永平寺町の文化拠点となっている永平寺町四季の森文化館傘松閣広間を使用し、これまで3回会議を開催しています。会議テーマは、会員から事前に提出していただく提案書よ

り決定しており、11月10日現在で、「教育福祉」「都市整備」「住民参加」など6分野66案が提出されています。

第2回と第3回の会議では、提案の中で、1番多くの意見があった「人口減少対策」を取り上げ、話し合いを行いました。会員の皆さんが複数のグループに分かれて付箋を使ってアイデアを出すなどの話し合いを行い、終了後、各グループの代表者が発表を行い全員で内容を共有する形で会議を進めました。

#### 【会議での話し合いはどのような内容ですか？】

##### ◆第1回町民まちづくり会

入会した理由などを含め、会員の方の自己紹介から始めました。「生まれ育った永平寺町のためにできることをしたい」「まちづくり活動に参加したかった」など、意気込みや永平寺町に対する熱い想いが語られました。また、提案書を書く上で参考にしていただくために、永平寺町の人口や財政、課題等の説明を行いました。

##### ◆第2回町民まちづくり会

「永平寺町の人口減少対策」をテーマに、3グループに分かれて自由に話し合いを行いました。各グループでは、「縁結びコーディネートをしたらどうか」、「空き家をリノベーションして、賃貸にするというのでは」、「本屋やファストフード、ショッピングセンターの誘致」など多分野からの意見が飛び交っていました。会員からは、「この問題についてもっと話し合いたい」とい

う声が多くあり、次回も同じテーマで行う方針でまよりました。

##### ◆第3回永平寺町未来会議

第2回と同様のテーマとし、前回の会議で意見が集中した「情報発信」「労働」「住居整備」「福祉子育て」の4分野のグループで話し合いを行いました。グループには、議題に関係する町の課長も参加して前回に比べてより具体的な政策や効果まで深い話し合いが行われました。

#### 【今後の予定は？】

今後は、一ヶ月に一度の開催を目安にして、今まで通り会員からの希望に沿った運営や話し合いを進める予定です。「永平寺町未来会議」では、町民と行政が一体となって、より魅力あふれる永平寺町をつくりあげるために、活動を行っていきます。そして、現在よりも多くの方に会員になっていただいで、より多くの民意を反映した町政を進めたいと考えています。



勝山市

はたや記念館ゆめおーれ勝山  
「機屋」の「元へ」 「夢」

はたや記念館ゆめおーれ勝山  
(勝山市商工観光部商工振興課)

松村 英之



「はたや記念館ゆめおーれ勝山」は、勝山市の管理・運営する施設で、市の中心部の恵まれた環境の中にあります。この記念館は、平成21年7月にオープンした6年目の若い施設ですが、実は、今から110年前と90年前に建てられた織物工場を保存・活用したものです【写真1】。

勝山市は、織物工場が建ちならぶ繊維産業が中心のまちです。このような「産業」としての織物は、明治時代に本格的に始まりました。

福井県において「羽二重」という絹織物で産業として成り立つようになったのは、明治20年頃と言われています。勝山の場合も同じ頃から始まっていますが、当初は、煙草や生糸の生産の方が盛んでした。しかし、明治時代の終わりが、勝山に大火がおそうとともに煙草が専売制となり、これからの産業をどのようにしていくか大きな転換を迫られました。多くの人々が織物業にカジを切っていききました。ゆめおーれ勝山も、明治37年に建てられ、平成10年まで操業していた木下機業場という織物工場でした。もともとは5棟あり、その内の2棟（明治37年・大正4年建築の棟）が保存されています。木造2階建ての建築で、勝山の典型的な

2 手織りコースター



「機屋（はたや）」の姿が残されています。

平成10年、建物群が取り壊される時に、文化財関係者が「勝山市の近代化を支えた繊維産業の歴史を知る貴重な建物だ」と、その重要性に気づき保存の声が上がりました。その結果、2棟分の保存が決定し、勝山市有形文化財の指定と、経済産業省の近代化産業遺産の認定が行われ、織物業の歴史を知る「博物館」として生まれ変わる作業が始まります。国の交付金をもらい、工事は建設部局、調査展示は教育部局、事務運営は観光部局という部局を横断する方法で行いました。

3 体験ホールの様子



4 手織りコースターの体験



また、「博物館」としての運営については、できるだけ多くの人に見てもらいたい、知名度を上げたい、市民に身近な施設となっていきたいなどの意見があり、開館当初は観光政策課所属の元、積極的な観光PRにより、県内外への知名度アップをはかりながら、年齢・性差を超えて気軽に集うことのできる仕組みを勝山市直営（一部業務委託方式）で、考えていきました。

特に「気軽に集える仕組み」については、喫茶店やお土産物の運営の他に、「体験」という要素を組み入れました。短い滞在で、安価で、手軽にできて、さらには織物のことを



5 まゆだまクラフト体験

「まゆだまクラフト」です。はじめは一日十数人を受け入れるだけでも大変でしたが、3年目あたりから、さまざまな工夫をし、最大八十名を受け入れることができるまでになりました。今では、遠足やレクリエーションのほか、親子連れや女性にも大人気となり、ゆめおーれ最大の魅力となっています【写真2・5】。

このほかにも、さまざまなイベントや講演会を行い、市民団体なども、館内外を使って、イベントを開くようになってきました【写真6・7】。このような体験やイベントを通してゆめおーれに人が集い、織物のことを全く知らずに来た方でも、「ゆめおーれって織物工場だったんだ」「勝山って織物が盛んな町だったんだ」「織物ってこのようにして織っていくんだ」など、楽しい思い出とともに、少しでも気づいて帰ってほしいと思います。

平成26年度は、大きな変化もあり

6 イベントの様子



7 講演会の様子

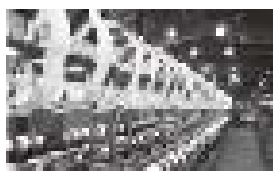


写真8 機械は動態展示を行う



写真9 織物工場で働いていた方の経験談を語ってもらう

ました。委託運営はオープン以来、当館の運営を熟知していたメンバーがそろったNPO法人まちづくり勝山に、所属も商工振興課となり「繊維のまち勝山」のシンボルとして、専任の学芸員を置き、商工・観光、文化の両面から振興を図っています。また、運営の面で目標や理念などを定め、さまざまな行事などを行う上での指針としました。なぜゆめおーれでイベントや体験を行い、多くの人が集まってほしいのか。「運営の理念」によると、勝山を支えている織物業の歴史が、常に新しいことに率先して取り組み、数かずの苦難を乗り越えてきた道程であり、「進取の精神」「夢をかなえる力」として、未来の勝山市民に受け継がれていかなければならないからです。ゆめおーれ勝山は、近代織物業を中心にしながら、ひろく勝山の歴史・民俗・自然の魅力を伝え、訪れる人びとに未来に向けての「夢、生きる力、喜び」を提供しつづけることをめざしています。館名「ゆめおーれ」にこそ、そのような使命・思いが託されているといえるでしょう【写真8・9】。





# いよいよ本格実施 子ども・子育て支援新制度

## 自治労福井県本部社会福祉評議会

2015年4月1日より、子ども子育て支援新制度が本格的にスタートする。基礎自治体が実施主体となることから、地域主権型子育て支援の構築への転換期といえよう。

本稿では、新制度の実施を見据えた自治労福井県本部の取り組みについて報告していきたい。

### 社会保障と

### 子ども・子育て支援

2012年8月、民主党・自民党・公明党の3党合意に基づき、「子ども・子育て関連3法」が成立し、すべての子どもと子育て家庭を社会全体で支えるための制度的枠組みが整備された。子どもの育ちと子育て支援は『未来への投資』として、従来の社会保障「医療」「年金」「介護」の3分野に「少子化対策／子ども・子育て支援」が追加されたことは画期的と言える。

2013年4月には内閣府に「子ども・子育て会議(※1)」が設置され、教育・保育の「量的拡充」と「質の改善」を車の両輪として取り組むこと、財源として約1・1兆円が必要であると確認された。

その財源は、「社会保障と税の一体改革」として進められた消費税率10%の引き上げによる増収分

(13・5兆円のうち0・7兆円)からの充当(恒久財源)と、国の予算編成過程における0・3兆円超の確保が大前提とされた。

※1 自治体における設置が努力義務となった「地方版子ども・子育て会議」は、福井県内のすべての自治体で設置。越前市と勝山市の同会議には、労働者代表として各連合地協から委員を輩出している。

### 「子ども・子育て支援新制度」の概要(総論)

新制度は、総論でいえば3点が挙げられる。まず、①**社会全体で子ども・子育て支援**。「保護者が子育ての第一義的責任を有する」という基本的認識のもとに、社会全体が子育てに協力することである。当事者への支援だけでなく、地域社会によるサポート、保育の質、働き方なども含まれる。

②**財源と制度の一体化**。保育園Ⅱ厚労省、幼稚園Ⅱ文科省、学童Ⅱ厚労省・文科省、といった錯綜し

た政府の体制から内閣府を中心  
一元化することである。③すべて  
の子どもの最善の利益。障害、虐  
待、貧困、一人親の状況等により  
社会的養護を必要とする子どもや  
子育て家庭が排除されることなく、  
必要に応じた措置が講じられる社  
会の実現である。

自治労では、新制度の基本理念  
に沿った制度の構築をめざし、果  
たすべき市町機能の強化と公立施  
設の役割を明確にする取り組みを  
進めてきた。

## 県と10市町へ 要請行動を実施

自治労福井県本部（以下、県本  
部）は、単組や組織内・協力議員  
と連携し、今年7月から9月にか  
けて、基礎自治体の首長への要請  
行動を実施した（自治労加盟の9  
市1町が対象）。福祉政策、それ  
も子育て支援施策に絞り込んで実



県子ども家庭課長に要請書を手交する  
亀間社会福祉評議会議長（左）  
（中央は野田富久県議会議員）

施するのは、初の  
試みであ  
ろう。な  
ぜ、要  
請行動を  
実施した  
のか？理  
由は、今  
回の新制

度により「市町＝実施主体」とな  
り、権限と責務が法定化されたこ  
とに依る。地域ニーズに基づく子  
ども・子育て支援事業計画（基盤  
整備の基礎）の策定とステークホ  
ルダー（利害関係者）から意見を  
聴取することが義務化され、国や  
県は市町を重層的に支える仕組み  
となるためである。

また、新制度には13事業と言わ  
れる「地域子ども・子育て支援事  
業」がある。「事業」という性格上、  
市町の裁量と判断で実施する施策  
であり、事業を実施するか否か、  
実施する場合はその実施内容も、  
市町の地域主権で具現化できる。

このような状況から、新制度の  
実効性の確保と質の向上をはかる  
ために必要な「実施体制（本庁お  
よび教育・保育施設）の強化」と  
「予算措置」を中心に要請書を提  
出した。

10月には、幼保連携型認定こど  
も園の所管であり、社会的擁護や  
障害児に対する専門的分野での市  
町との広域調整を行う福井県に対  
して、市町への支援や財源確保を  
重点に要請を行った。なお、財源  
確保に関しては、福井県市長会や  
町村会への申入れ、連合福井と連  
携し福井県への政策要請を行って  
いる。

この要請行動に先駆け、県本部は  
「子ども・子育て支援新制度の本格  
実施に向けた自治体対策会議」を

開催して  
いる。自  
治労組織  
内・協力  
議員、単  
組・教育・  
保育施設  
の組合員、  
担当課、  
組合役員  
等、県本  
部が一堂  
に会し、議論したことは、福祉領域  
における政策課題の解決に向けた  
大きな成果となっている。



自治体対策会議には48名が参加

## あわら市 5歳児保育料を無償化

新制度の実施に合わせ、あわら



先進的な幼保連携の事例が報告される

市では、就学前教育を重視し、公  
私立とも一律に「幼保連携型認定  
こども園」に移行させる。加えて、  
5歳児の保育料を無償化（延長保  
育や一時預かり等は対象外）する  
としており、県内初で全国でも珍  
しい事例となる（※2）。越前市  
では、家庭の養育力低下に対応す  
るために、2013年度より「子  
育て総合相談窓口」を設置し、子  
ども相談体制のワンストップサー  
ビスを展開している（※3）。こ  
のように独自の子育て施策を講じ  
ている自治体も見受けられる。

一方、市町が定める確認基準や  
認可基準等、福井県が定める幼保  
連携型認定こども園の認可基準等  
は、福井県内では9月議会で条例  
制定されているが、ほぼ国が定め  
た基準に準拠している。国の基準  
はあくまでも最低基準であり、地  
域に応じた基準設定が課題となっ  
てくるであろう。

県や市町が策定する「子ども・  
子育て事業計画」は、5年を1期  
に定めることとされている。5年  
後の次期改定を見据え、地域全体  
の子育てに関する質の向上をめざ  
していきたい。

※2 県本部第24回保育集会の事例報  
告より。

※3 2013年7月発行の自治研ふ  
くい第55号を参照されたい。





社会資本をいかす

まちづくり

福井県自治研集会開催

2014福井県地方自治研究

集会in敦賀

9月12日と13日、自治労福井県本部と福井県地方自治研究センターが共催しての「2014福井県地方自治研究会in敦賀」が敦賀市「あいあいプラザ」と敦賀港周辺で開かれ県内9市から45名が参加しました。

12日は、初めに坂井市の「公共施設白書」作成の取り組みについて坂井市総務部行政経営課の小林壮太郎氏から取り組みの経過と現状について報告がなされました。

小林氏は白書作成は4町合併と将来の人口減少と少子高齢化の進行を背景として本来に必要な施設としての検証と機能を見極め、市民、議会、行政との情報と意思の共有を中心に、客観的な数値を示しながら、対話を重ね地域説明会などを重ねてきた。

今後の進め方としては、部局横断的な組織の連携、施設情報データの一元化、PDCAサイクルの実施、財政計画との連動、情報公

開による問題意識の共有化、市民協働と公民連携の推進を基本としていると報告されました。

参加者からは、どの自治体にとっても避けられない課題であり、真剣に考えていきたいとの感想が多く寄せられました。

パネルディスカッションでは、県自治研センターの伊藤副理事長がコーディネーターを務め、下記の方々から活動報告を受け行われました。

- 敦賀市博物館 高早恵美さん  
リニユアールする博物館と山車会館など周辺のまちづくり
- 福井まちづくり株式会社  
荒谷定生さん

福井駅前周辺の活性化などの事業について

- 越前市しらやま振興会  
増田久恵さん
- 坂井市総務部 小林壮太郎さん  
坂井市公共施設白書のとりくみ

安養寺分校廃校舎活用とほたるカフェ  
パネルディスカッションの中では、いずれの方からも、まちづくりには住民の皆さんとの対話がもっとも大事であり、各種イベントでは「物販重視」よりも「共に過ごせる、滞在できる」視点と取り組みを心掛けていると話されました。

2日目は、敦賀港周辺の「鉄道博物館」「赤レンガ倉庫」人道の港「敦賀ムゼウム」「市立博物館と山車会館」などが立ち並ぶ街並みでワークショップを行い、敦賀の持つ歴史とまちづくりを学び、参加者からは初めて歩いたところが多くとても良かったとの声がありました。



あわら坂井市民

自治研究センター

第三回総会と記念講演

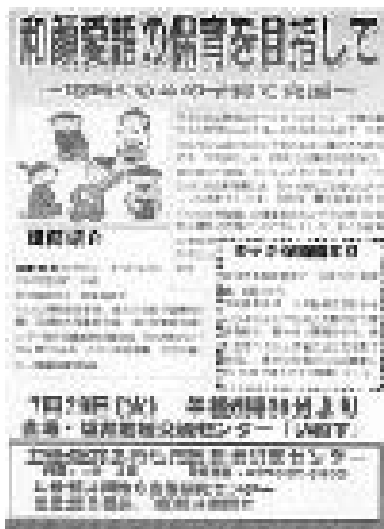
地域での活動充実を実感

記念講演は

「和顔愛語の保育を目指して」

坂井あわら市民自治研究センターは7月29日、第三回総会と記念講演会を坂井市「いねす交流ホール」で開き80名が参加しました

記念講演会では、わか保育園理事長の中村宗玄さんが「和顔愛語の保育を目指して」をテーマに話され、保育園を開園した動機として、共稼ぎの核家族という家庭事情のもとで行った子育ての経験から、保育や放課後児童クラブの必要性を痛感したことや、PTAやまちづくり協議会の活動を通じ



て、地域の人々との連携なくして子育てはできないとの認識を得たことなどを、体験談を交えながら語られました。

地域とのつながりを第一に考えた保育を実践している中村理事長のお話は、新制度が導入される来年度に向けて、今後の子育て支援のあり方を考えていく上で大変参考になったと参加者から好評でした。

## 第四十一回ちよつと講座

### 集団的自衛権を

### 「永続敗戦論」から考える

アメリカへの従属は、

### 東南アジアでの孤立へ

8月25日、第41回「ちよつと講座」が、文化学園大学助教

の「白井聡」氏を迎えて、集団的自衛権を「永続敗戦論」から考えるのテーマで、約40名が参加して開かれました。

講演の中で白井氏は、「永続敗戦論」を中心として次のような視点も紹介していました。

3・11以降「戦後レジーム」は急速な崩壊過程に突入し「戦後の本質」の可視化の状況にある。平和と繁栄という戦後のイメージがバブル経済が終わった時点で崩れているのに感覚的にはずると続いていた。

国内では、原発事故、官僚制不信、エリート層の全般的無能性の露呈、核武装欲求の表面化、排外主義の跋扈。国際的には、領土問題、経済戦争などがある。

しかし今、隠されていた本質が表に出てきて見えるようになっていく。「平和と繁栄」の時代の全面的終焉から「戦争と衰退」へ突入

ではないか。

安部政権の歴史修正主義、軍事への傾倒が危ない、集団的自衛権行使容認閣議決定は戦後憲法への死刑宣告である。

アメリカの態度はこれまでの「互

恵」から「収奪」への方向であり、TPPなどを含めて従属強化に進んでいる。安部政権のアメリカへの従属路線は今後ますます日本が東南アジアで孤立することにつながる。

「ちよつと講座」は、県自治研センター、福井県職、福井市職、福井地区平和センター、永平寺町勤労協などが共催して開いている講座です。

## NPO法人丹南市民

### 自治研センター

### 「多様な性を考える」講演会

### 総会と記念講演

記念講演は、LGBTって何？

NPO法人丹南市民自治研センターは十月三十一日、越前市生涯学習センターで第十四回定期総会を開き、120名が参加する中で新年度も、市内のNPO団体との交流連携を深めながら市民フォーラムや研究事業をさまざまに取り組むなどの方針を確認しました。

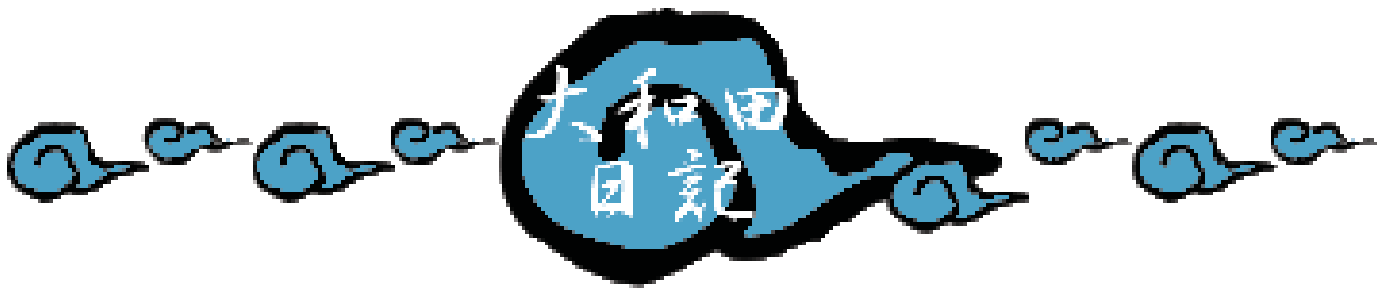
また、役員改選では交代したフレッシユな新理事四名が承認されました。二十二名の理事の中で男

性は十四名、女性は八名の構成です。

記念講演は「LGBT」って何？のテーマで開かれ、講師の小林和香さんが自身の体験や最近の動きなどを分かりやすく話されました。

参加者の多くは、初めて聞くテーマでしたが、今日の社会の中で「多様な性」について学び、今後の自分自身の対応や行政の在り方などを考えさせられた講演だったとの感想でした。





◎活動の記録（2014年8月～12月）

- ・7月28日 自治研ふくい57号発行
- ・8月24日 自治研センター 県本部合同幹事会（自治労県本部会館）
- ・8月25日 第41回ちよつといつて講座  
集団的自衛権を「永続敗戦論」から考える（県国際交流会館）
- ・9月12日 丹南自治研センターポケットセミナー  
「広域避難者支援の活動」越前市仁愛大学サテライト
- ・9月12日・13日 自治労福井県本部自治研集会  
「社会資本をいかすまちづくり」（敦賀市あいあいプラザ・敦賀港周辺）
- ・9月30日 自治研ふくい第二回編集委員会（自治労県本部会館）
- ・10月8日 自治研ふくい 里海里山湖研究所取材
- ・10月8日 自治研福井・フェイスブック開設
- ・10月10日 越前市白山区振興会取材
- ・10月16日～18日 第35回全国地方自治研究集会（佐賀市）
- ・10月31日 丹南自治研センター第14回総会と記念講演会  
「講演会 多様な性・LGBTって何？」（越前市生涯学習センター）
- ・11月5日 自治研ふくい あわら創生塾取材
- ・11月14日 第42回ちよつといつて講座  
「アペノミクスの終焉と成長神話からの脱却」（県国際交流会館）
- ・11月11日 丹南自治研センターポケットセミナー  
「鯖江市JK課の真実」（仁愛大学サテライト）

◎編集後記

東奔西走！今回の取材では、まさに南は若狭町から北は石川県まで走り回りました。ところが、よく考えてみると今回の取材先である里山里海湖研究所は、県内一円で様々な取り組みをおこない、「シビカリキャラバン」に至っては、南は鹿児島から北は北海道まで走り回っています。新たな取り組みに東奔西走する自治体職員の手を強く感じながら東奔西走した取材でした。

今回の取材を通して、各自治体の街づくりに対する思いも様々で熱意を感じました。また、福井県の未来を担う子供たちへの取り組みの必要性和たけがかりを知ることができました。

10月17日から18日に「毎日の仕事の、ちよつと先。さがしてみよう、わがまちの未来」をテーマに佐賀で開催された地方自治研究全国集会のレポートも掲載しています。今後は、「毎日の仕事のちよつと先」を探して読者の皆様の気付きのお手伝いができたらと考えています。

（編集部 慎）

◎投稿募集！

「自治研ふくい」では、新たにフェイスブックを立ち上げました！【自治研 福井】で検索して、【55ねー】と【メント】をお待ちしています。ちなみにホームページでもURLを掲載しています。皆様からの情報を募集しております。

自治体の動きや町の活動、職場での話題など、お気軽に書き込んでください。

## 福井県地方自治研究センター会員募集

自治研センターの会員を募集しています。ぜひ積極的な加入をお願いします。

個人会員 1年間 2,000円 団体会員 1口 5,000円

●活動内容と会員サービス

- 1.当自治研センターが主催する各種講演会、学習会について会員の皆さんにご案内を差し上げます。
- 2.会員が集会や講演会をされる場合、講師のご紹介や会場の斡旋を行います。
- 3.住民本位の地域政策を策定していくため、課題別の研究会を設け、活動を進めます。
- 4.当センターの活動経過や各種情報、研究成果等を掲載する「自治研ふくい」を発刊し、会員にはご自宅へ無料で送付します。

【申込先】 〒910-0836 福井市大和田2丁目517番地  
自治労福井県本部内 TEL(0776)57-5800 FAX(0776)57-0690  
E-mail:f-jichiken@j-fukui.jp

# 第47回衆議院議員選挙結果

福井県内開票結果 (福井県ホームページより)

平成26年12月14日執行

## 福井県第1区選挙区

## 福井県第2区選挙区

市町名	候補者別得票数			得票総数
	鈴木こうじ	稲田ともみ	かねもと幸枝	
福井市	27,982	62,670	8,165	98,817
大野市	3,107	9,037	1,189	13,333
勝山市	2,182	7,629	836	10,647
あわら市	3,094	8,326	986	12,406
坂井市	9,360	23,570	3,444	36,374
市計	45,725	111,232	14,620	171,577
永平寺町	2,077	5,623	941	8,641
町計	2,077	5,623	941	8,641
第1区計	47,802	116,855	15,561	180,218

市町名	候補者別得票数				得票総数
	つじ 一憲	高木つよし	うの 邦弘		
敦賀市	7,058	16,112	2,140		25,310
小浜市	4,783	8,577	1,058		14,418
鯖江市	8,019	14,154	1,752		23,925
越前市	11,567	16,795	2,539		30,901
市計	31,427	55,638	7,489		94,554
池田町	316	914	254		1,484
南越前町	1,595	3,668	300		5,563
越前町	3,366	6,649	500		10,515
美浜町	1,072	3,610	286		4,968
高浜町	1,148	3,592	344		5,084
おおい町	1,117	3,270	253		4,640
若狭町	1,991	5,745	515		8,251
町計	10,605	27,448	2,452		40,505
第2区計	42,032	83,086	9,941		135,059

## 比例代表各政党等の県内得票

届出番号	政党名	得票数	得票率(%)
1	日本共産党	22,500	7.19
2	民主党	48,809	15.59
3	社会民主党	6,973	2.23
4	生活の党	4,380	1.40
5	自由民主党	143,387	45.80
6	維新の党	48,748	15.57
7	公明党	30,757	9.82
8	次世代の党	5,315	1.70
9	幸福実現党	2,224	0.71
得票総数		313,093	100.00



